

外部評価委員長による令和元年度博物館事業点検評価の外部評価総括

令和元年度の「博物館使命の四大要素」への評価は、自己評価・外部評価ともに、「歴史と文化の継承と研究」がC、「歴史と文化への窓口」がB、「人々とともに歩む」がA、「やさしさと安心の確保」がBであった。過去2年と比べ「歴史と文化の継承と研究」の評価が1ランク下がるという結果であったが、各項目で見ればB評価の方が多く、限りなくBに近いC評価である。

令和元年度は、前半は改修工事のため休館していたが、11月2日にリニューアルオープンを迎え、博物館として新たな一歩を踏み出すこととなった。ただし、その一方で、リニューアル関連の業務に忙殺され、博物館の基本業務である資料保存や調査研究に支障をきたし、「歴史と文化の継承と研究」については残念ながらC評価となってしまった。今後はオーバーワークに陥らない業務計画の策定を期待するとともに、とりわけ空調設備とその運用の不備不具合があった点については早急な改善を求めたい。

「歴史と文化への窓口」については、「神戸の歴史展示」が1階の無料ゾーンにおいて公開され、2階の「コレクション展示」が展示環境も含めて充実し、リニューアル記念の名品展とともに博物館の地力を十分に発揮した。また、改修中に台湾の故宮博物院南部院区で開催した「交融之美」展で好評を博したことも高く評価できる。今後はSNSも含めた種々の手段によって広報に一層力を入れ、国内外との交流事業も積極的に展開し、引き続き神戸の歴史文化の発信に努めてほしい。また、ミュージアムグッズの開発も望まれるところである。

令和元年度前半はリニューアル中であつたにもかかわらず、学校等との連携活動はこれまでと同様に多彩かつ順調に行われた。また、文化庁補助事業による地域の大学や博物館施設との連携活動も充実し、「人々とともに歩む」は例年通り高い評価であった。強いて言えば、学習支援交流員(ボランティア)養成の一層の充実が期待されるだろう。

「やさしさと安心の確保」については、改修によりトイレや照明設備が充実し、ミュージアムショップとカフェが魅力的な空間として再生される一方、改修を経てもなお老朽化の影響を完全に解消できていない点も判明し、A評価とはならなかった。今回の改修で終わりではなく、引き続きメンテナンスには注力し、安全かつ快適な場の確保をお願いしたい。

令和元年度末、2020年3月からはコロナウイルス感染拡大により博物館の活動も一変することになった。当初は活動休止という対応であったが、今後はまずは感染防止対策に取り組むとともに、単にコロナ禍における取り組みを検討するだけでなく、ポストコロナ時代を見据えた新たな博物館のあり方を模索してほしい。

外部評価を行った委員

(令和2年度 博物館協議会委員)

[協議会会長(外部評価委員長)]

藤岡 穰 大阪大学大学院文学研究科教授: 仏教美術史

[協議会副会長]

原田 正俊 関西大学文学部教授: 日本中世史

[協議会委員]

森 広樹 神戸市立小学校教育研究会社会科部副部長(西須磨小学校長)

渡邊 研 神戸市立中学校教育研究会社会科部長(高取台中学校長)

奥村比左人 神戸労働者福祉協議会副会長(三菱重工労働組合神船支部執行委員長)

井上 優 特定非営利活動法人こうべユースネット副理事長兼財務担当

栗林 直美 神戸市ネットモニター

高尾 ひろ子 神戸市婦人団体協議会副会長

戸田 清子 奈良県立大学地域創造学部教授: 日本経済史

黒田 千晴 神戸大学国際連携推進機構国際教育総合センター准教授: 比較国際教育

禰宜田 佳男 大阪府立弥生文化博物館館長: 考古学

馬淵 美帆 神戸市外国語大学外国語学部教授: 日本近世絵画史

内海 芳宏 旧居留地連絡協議会はいからプロジェクト実行委員会会長

歴史と文化の継承と研究

本館の歴史と文化の継承と研究の取り組みについて、本館長が語る。

自己評価詳細

前半期については、リニューアル工事の最終段階を迎えていたため、それらの業務に忙殺され、資料補修や資料保存の業務が十分に機能していなかった。同様の事情から、調査研究のうち、『館蔵品目録』『研究紀要』についても発刊を見送ることとなった。次年度については、業務が旧態に復するので、調査研究に基づく、補修、保存、調査研究の発信に繋げていくことが望まれる。空調設備の不具合等については、今後も注視し、よりよい環境の創出に向けて関係各所と調整を続けていくことで対応したい。

外部評価委員コメント

- ・リニューアル工事があり、資料保存・資料補修に十分力を注げなかったことは仕方のないことだと思います。
- ・博物館の収蔵品や資料は神戸市民の宝です。湿度管理や虫菌害に問題があることは見過ごせない問題ではないでしょうか。イベントや特別展の開催よりも、大切な役割であると思います。華やかなアミューズメント提供の展示などに目を奪われがちな私たち市民の認識を変えることも必要なのでしょう。市民の宝を守る役割を担っていることを市民に理解してもらおう発信も必要なのではないのでしょうか。管理・保存のための予算確保は市民の宝を守るための必要経費です。ぜひ、十分な維持管理ができる体制を確保していただきたいと思います。
- ・博物館には貴重な資料も多く所蔵されており、適切な環境で資料を保存することは、何よりも大事なことです。リニューアルに伴う不具合や資料の展示・保存環境が安定していない状態が認められるとのことであるが、改善調整も検討されており、不測の事態にも対応できている。(収蔵庫・展示室の保存環境への評価:B)
- ・館蔵品目録・研究紀要は1984年3月の第1号から研究活動の一環として、1995年の震災年を除き毎年発行されています。リニューアルオープンに向けた準備のため、研究成果を発信する「研究紀要」を中止することは無念の思いではないのでしょうか。次年度では2年度分の成果を提案・発信していただきたい。(館蔵品目録・研究紀要・年報への評価:B)
- ・研究紀要が発刊されなかったことは残念である。学芸員がじっくり研究できる時間がとれるような職場環境の整備が望まれる。こうした体制により、よりよい展覧会企画ができるものと考える。
- ・資料受入:限られた予算の中で、神戸に関する資料を中心に、館蔵品を拡充することができたことは、高く評価できる。
- ・資料保存:評価資料にあるように、リニューアル工事にもなう不具合、猛暑の影響で、空気環境が悪化し、害虫、カビの発生など、虫害菌の影響が出てしまったことは、大変懸念される事態である。貴重な所蔵品の劣化を防止するためにも、抜本的な改善策が必要であろう。収蔵庫清掃に関しては、学芸員が担う業務となっているが、負担が重いのではないだろうか。また、特定の学芸員に当該業務が固定化することも、避けなければならないと考える。新たな予算を組んで、民間の清掃業者(美術品専門の業者)に依頼するなどして、学芸員の方々の負担を軽減することも必要ではないかと考える。学芸員の日々の努力や資料の保存状況、清掃等については、来館者にはほとんど知られることがないが、適切な資料保存と環境整備は、博物館の所蔵物を安定した良好な状態で保つための重要な条件である。日々の学芸員の方々の地道な努力がなければ成し得ないことと思う。リニューアルオープン後は、最新の設備が整った適切な保存環境が保たれるとは思いますが、工事完了後に、不具合も発生しているので、心配な状況である。資料の劣化をいかに防ぐかという点については、今後も重要な課題となろう。当館には、大変貴重な資料も多く所蔵されている。今後50年、100年先を見越しての、可能な範囲での、適切な保存環境を保持していくことが望まれる。
- ・調査研究:新型コロナウィルス感染の拡大によって、計画通りに調査研究が行えなかったことは残念に思う。しかしながら、今後の展覧会開催に向けて、関連する調査研究が確実に行えたことは、評価できる。また、コロナ禍の厳しい環境のなかでも、講演会が盛況に終わり、執筆活動などの面でも充実が図られたことは、大いに評価できると考える。いつもながらのコメントで恐縮であるが、さまざまな事情、社会状況などから、学芸員の方々が、本来の業務である調査研究や展覧会準備などに十分に専念できないといったことが懸念される。継続的に調査研究を行っていくことは、博物館にとっての「知の蓄積」につながるし、その蓄積が当館の魅力の源泉、知の財産となることは、論を俟たない。現在、都市部の博物館には、多くの役割が求められており、学芸員に求められる資質や業務も多岐にわたり、多忙を極めることと推察される。しかしながら、リニューアルを契機に、可能な限り、本来の仕事である調査と研究に専念できるよう、学芸員の業務の負担軽減を考えていくことも、必要かと考える次第である。
- ・資料受入に関して、貴館は収蔵資料の分野が幅広いことから、自己評価にあるように、今後収集方針の策定を検討されるとよいと考える。調査研究に関して、直接展覧会に関係する調査のみならず、個人の研究テーマに基づく調査等も実施されていることは、学芸活動を深める意味で高く評価できる。今後もぜひ継続していただきたい。
- ・リニューアル工事に関連して、その都度必要な対応をこなされるだけで多忙を極められたと思います。調査研究に関して、今年度は研究紀要等の発行を見送られたとのことですが、研究論文1件、執筆54件と論文数、昨年度との比較において執筆数が堅調に増加しており、研究成果の発信が十分にできていると考えます。
- ・リニューアル工事を進める中での通常業務には、多大なご苦勞があったと推察する。そうした中で、購入も含め、資料の受入を順調に果たしたことは評価される。資料保存について、空調設備の不具合をマイナスと自己評価されているが、これは致し方ないことであろう。むしろ危惧されるのは、保存・展示環境のモニタリングや保全を必ずしも専門的知識を持たない学芸員が行っていることである。将来的には専門的知識を持った技術員に任せられるような体制を整えるべきではないだろうか。資料補修については、予算を余らせたことがあまりにももったいない。
- ・科研申請のできる「研究機関」になるという検討はおこなってきたのか。神戸の歴史を総合的に研究し展示に反映させることは意義深いと思います。コロナ禍のなか、講演等をウェブで実施することの検討はおこなったのだろうか。これからの時代、博物館に行きたいが行けない(行くのがこわい)という人へのフォローが必要だと思います。

歴史と文化への窓口

自己評価詳細

リニューアル工事によって、積年の課題であった有数の館蔵資料を活かすコレクション室を創出したこと、ならびに港を中心とした神戸の歴史展示室を無料ゾーンとして来館者に提供できるようになったことは、今年度の評価のなかで特筆すべきことである。

今後は、これらの空間において、各分野の学芸員の調査研究の成果を反映させる取組が重要となってくるものと考えられる。期待したい。

また、体験学習室や情報コーナーにおいても順次更新を行い、さらなる充実を図ってほしい。

特別展示では、実務面でやや齟齬があったようだが、館蔵資料をもとにした「交融之美」展を国立故宮博物院南部院区で実施できたことは、神戸市立博物館を世界的にアピールできた大きな成果と捉えてよいだろう。リニューアルオープン後の「神戸市立博物館名品展」では、あらためて館蔵資料と対峙する機会となったであろうし、「建築と社会の年代記」では博物館と企業が展覧会を創るといった点で有意義であった。

外部評価委員コメント

・コートールド美術館展について、東京都美術館での展覧会では30万人以上を動員し、好評であっただけに、愛知県美術館での途中閉幕、神戸では作品の展示を完了していながら、中止を余儀なくされたことは、新型コロナウイルスの感染拡大防止とは言え、準備に携われた多くの皆様には非常に残念で無念であったと思います。コートールド美術館所蔵作品60点の公開という貴重な機会、神戸会場では「名画と一緒に記念写真を撮ろう!」の企画もあり、鑑賞を楽しみにされていた方も多かったと思います。現在「コートールド美術館展 魅惑の印象派」神戸会場内展示映像(約12分)が展覧会公式サイトにて特別公開されています。評価が困難とされたのは、開催延期のためと思いますが、準備から開催前までの取り組み、対応等について評価すべきと考えます。(「コートールド美術館展」への評価:B)

・広報について、Facebook、TwitterのSNS発信に合わせて、ぜひInstagramをとり入れていただくことをご検討ください。博物館の外観・内観は共に美しく、来場者を増やせると思います。

・台湾における特別展は評価できる。ただ、ワシントン条約の定めがあるとはいえ、軸首の換装作業は作品保護の観点から残念である。当局との交渉など今後の課題とすべき。グッズ開発は外部業者のアイデアを採りいれるべき。あるいは、大学生・若者の意見を参考にすることも考えてほしい。

・常設展:長年の課題であった常設展示を一新し、コレクション室を創出したこと、港を中心とした神戸の開港都市としての歴史を展示し、無料で開放したことの意義は大きい。「情報コーナー」「体験実習室」では、訪れた人々が閲覧や、学芸員とのかかわりを通じて交流し、展示物や神戸の歴史について、理解と関心を深める場になればと思う。神戸における外国人居留地の存在は、近代神戸のまさに生きた歴史であり、近代の街の先進的モデルでもある。旧居留地のあちらこちらに、その歴史の貴重な片鱗が存在するが、市民の方や観光客の多くは、それを知らないまま、通り過ぎるのかもしれない。そうした居留地の歴史を、ストリートビューや古写真で市民に広めていくことも、当館の大きな役割ではないだろうか。ただ、自己評価のマイナス点でも記載されていたように、展示に関するキャプションが小さい点については、改善の余地があると思う。実際、美術館・博物館を訪れる入館者は、圧倒的に中高年が多い。ある程度の知識をもって来館されているとは思いますが、説明文の文字が小さくて読めないことは、展覧会への関心や興味をそぐ結果にもつながる。館内のほの暗い照明のなか、観る人のことを考えた、中高年層にもはっきりと読めるようなキャプション、大きな文字の説明パネルを工夫して頂きたい。

・特別展:「建築と社会の年代記―竹中工務店400年の歩み」は、大変興味をひく企画展であった。竹中が手掛けた多様な建築物、その建築物と人とのかかわりが、日本の歴史を軸に、社会の変遷とともに、観る者にダイナミックに伝わってきた。どの時代にも、モニュメンタルな建築が存在する。観る人にとって共感を覚え、懐かしさを感じる「時代」を、建築を通して見つけられたのではないだろうか。展覧会全体の構成も、非常に優れていたと思う。竹中大道具館と連携し、海と山に離れた施設を「建築」で結ぶことができたのは、神戸ならではのアイデアであり、有意義な企画だったと、高く評価できる。図録も大変充実した内容で見応えがあり、建築のみならず、建築を通して、日本が歩んできた歴史の一端を読み取ることができたように思う。

・ミュージアムグッズ開発:ミュージアムグッズに関しては、なぜか以前販売していたような、市立博物館らしい商品、たとえば、川西英のカレンダーや画集、ポストカードなどが姿を消しており、狭いスペースのせいか、グッズの種類も極端に少なく、精彩を欠いているように感じられたのが残念であった。根強いファン層が存在するため、川西英のグッズや、現在注目されている、神戸出身の若手鳥瞰図絵師・青山大介氏の鳥瞰図グッズなど(販売元:くとうてん)も、検討してみたいかがだろうか。ミュージアムグッズは今や、美術館・博物館を訪れる人たちの、大きな楽しみになっており、博物館や美術館を訪れる魅力の一つにもなっている。どこにでもあるグッズは、おいてもあまり意味がないし、人目を惹くこともない。大きな企画展、巡回展関連のグッズはいうに及ばず、神戸市博ならではのミュージアムグッズ、たとえば、居留地関連のグッズや、神戸ゆかりの外国人に関連したグッズなどを展開できれば、それが当館の新しい魅力にもつながるであろう。歴史を掘り起こせば、新たなミュージアムグッズを新規開発できるアイデアの宝庫が、ここには豊富にあるのではないかと考える。これからのミュージアムグッズの新規開発に期待したい。

・常設展に関して、コレクション展示室と無料ゾーンの創出は待望されたところであり、一層来館者の期待に応える展示室になったと考える。コレクション展示室は現状で入場率が低いが、貴館の優れた所蔵品のアピールとあわせて、次第に市民・利用者に定着し認知度が上がることを期待したい。特別展に関して、海外大規模館(国立故宮博物院南院)における所蔵名品展の開催は、地方公立館の事業として稀な企画といえ、貴館学芸部の意欲の高さが特筆される。リニューアル記念名品展の自己評価に、土曜日夜間の入場者数が低いとあるが、入場者数のデータ等に基づく開館時間等の再検討が求められる。

・SNSでの広報として、TwitterとFacebookを活用しておられるとのことですが、、ビジュアルの美しさも含めて広報するという面においては、Instagramもよりふさわしいのではないかと思います。また、多忙な業務の中で、SNSを定期的に発信していかれるのは大変なことだと思うので、神戸市の広報課とご相談の上、SNSで情報発信を代行してくれるアンバサダーを募集するなどして、委託できることは委託されてはどうかと思います。

・常設展、HP更新、カタログなど、リニューアルオープンにあわせて多岐にわたる事業を展開している。事業が集中し、一部に不完全なところがあったり、作業工程に反省があるようだが、もっと積極的に自己評価してよい。なお、動線にかかわり、各部屋での半券の呈示が問題になっているが、シールを配布するなどすれば、解消できるのではないか。

・withコロナの時代、常設展の動画公開の可能性を検討いただきたいと思います。入館者からのさまざまな要望についてはご検討いただき、改善できる点については実行していただきたいと思います。

・神戸市の姉妹都市に存在する多くの博物館との相互交流事業を進めてもらいたい。

人々とともに歩む

自己評価詳細

例年のことであるが、社会教育施設としての博物館の学校教育・生涯学習の面で十分な役割が果たしているものと考えられる。休館中であつたにもかかわらず、連携授業に取り組んだ点も大いに評価できる。

新たな取り組みとして未就学児と保護者のための鑑賞会を実施できたことは好ましい。好評だったことを踏まえると今後も継続する取り組みとしていければ良いと考えられる。長年継続してきた文化庁補助事業は多くの組織と連携した取り組みであつたが、準公金の取り扱い停止という指示のもと、令和2年度以降中止とせざるを得ないのは残念であつた。

今後、地域や大学、研究機関などとの連携を模索していくことが望まれよう。

外部評価委員コメント

- ・リニューアル工事により、博物館見学ができないという現状もあつたが、博学連携事業の大きな伸びは評価できる。学校現場としては、ありがたいかぎりである。
- ・広報では市内への学校チラシ配布に制限があり、ご苦労されていますが、コロナ禍にあつて、子どもとの時間の過ごし方、接し方等で、外出する機会を考えているのが実情です。幼児から小学生までの年齢層に「博物館に親しんでもらう」ためにも、下記の施設への広報をご検討いただければと思います。市内児童館(9区125か所)、市内中高生のためのコミュニケーションスペース(9区9か所)。(子供向け普及事業への評価:B)
- ・博学連携:美術館や博物館を訪れる人々の年齢層を考えると、中高年の方が多と思うが、子どもや若い人々に、博物館に馴染んでもらうことも大切であろう。大学との連携、ボランティア団体、学術団体との連携は、今後一層、重要になってくると思う。ただ、評価資料に記載されていた、大学との関わりのなかで、「認識の違いから、双方の意思疎通課題が残されている」という点が気になった。
- ・学習支援交流員:今後の交流員の確保、ノウハウの蓄積と伝達、良好なコミュニケーションの構築など、課題は多いが、これまでの成果については、当館関係者、交流員の方々の地道な努力の積み重ねの結果であると、その活動に対して高く評価したい。居留地展示が充実すれば、居留地のガイドも充実するであろう。館内の展示施設を利用して説明を行い、そのことが、ワークショップの「プレ学習」になれば、居留地の歴史についての理解もさらに深まり、館内一館外を結ぶ、有機的な学習が可能になると、大いに期待できる。
- ・地域との連携:コロナ禍という前代未聞の事態にもかかわらず、各美術館・博物館との連携を強め、魅力ある企画や学芸員の専門性を生かした講座、講演会などを、継続して開催できているとは、高く評価できる。しかし、こうした連携を保持していくためには、十分な人員を配置し、連携先とのコミュニケーションを円滑に図っていくことが必要不可欠であろう。各種の観光・ガイドのボランティア団体や、NPO法人神戸外国人居留地研究会など、近代神戸に関する研究蓄積が豊富な研究団体もあるので、こうした研究団体との連携や人事交流も、今後の検討課題としてよいのではないだろうか?当館が旧居留地に立地していることの意味は大きく、神戸の「知の拠点」として、長年、その存在感を示してきたことは、大いに評価できる。以前にも提案したことだが、貿易・教育・文化などの面で活躍した外国人たちが眠る神戸外国人墓地の調査研究や、数年前に近隣美術館と共同開催した「阪神間モダニズム展」のPARTⅡの開催なども、多くの市民の関心を惹起できる事業ではないかと思う。まずはコロナ禍の終息を待たねばならないが…。
- ・博学連携に関して、大学側から関わる者として、連携事業について大学内での共通認識ができにくい状況があると感じる。大学内で神戸市立博物館自体への理解を深めることがおそらく必要であり、そのための方策を共に検討していきたい。
- ・リニューアル期間中であつたにもかかわらず、例年通り(中には例年以上に)学校や地域団体との連携によるアウトリーチ活動を積極的に行っておられる点が高く評価できると考えます。未就学児と保護者のための鑑賞会の取り組みは、幼少期から藝術に触れる機会を与える教育効果も期待でき、このような地道な活動が、現在課題としておられる中高生や大学生の来館者の増加に将来的に繋がる可能性があるのではないかと期待します。
- ・普及事業(一部、博学連携と重なるが)は従来からの強みであり、当年度においても順調に活動が行われた。令和2年度より文化庁からの補助金が利用できなくなったとのこと、補助金頼みを脱する好機ととらえたい。
- ・博物館と関わる多様な方々に博物館に来ていただく事業は重要だと思います。今後も新たな対象を開拓して行っていただきたい。繰り返しになるが、博物館に来れない人に対する企画も必要ではないでしょうか。でも、まずは実態把握から始めないといけないかもしれませんね。
- ・諸外国の博物館と比べ閉鎖的であつた和式のイメージから国際的な博物館基準をとり入れたと感じる当館の変化は賞賛したい。”開かれた博物館”による市民への規制は和らげるべきであると思う。狭義の専門性の追求、提示だけではなく地域連携に於ける文化振興への一層の取り組みが、市立博物館を身近に感じる機会であるので、今後の取り組みに期待したい。

やさしさと安心の確保

自己評価詳細

老朽化している設備が多く、その中で適時、対応が行われている。また、インフォメーション業務、警備・清掃に関しても開館時、閉館時ともにも柔軟に対応が行われた。

博物館の管理、運營業務に関して、全体的に求められる能力や役割を果たせたものと考えられる。

外部評価委員コメント

- ・インフォメーション、ショップとカフェに足を運びました。とても素敵な空間でした。博物館に気軽に立ち寄れる仕組みづくりができると尚良いと思います。
- ・インフォメーション、ショップ・カフェ:リニューアル後のカフェ及びミュージアムショップについて、旧トムセン邸と旧横浜正銀時代の雰囲気伝わる空間の構築をめざし、工程通りに工事が完了したことについては、評価できる。ただ、ミュージアムショップのスペースが思いのほか狭く、照明も暗く、しかも、カフェと隣接しているため、ショップで収録などを見ている、飲食の匂いがしてきて落ち着かないといった声を、たびたび聞くことがある。このような意見をもつ人たちは、以前からの当館のファンなので、大変残念に感じる。何か改善策はないものか、もし改善の余地があるのであれば、検討して頂けたらと思う。
- ・緊急時対応:現在はコロナ禍にあり、兵庫県においても連日100名を超える感染者(陽性者)が出ている。当館においても、入館時の検温、消毒はいうまでもなく、マスクを着けない入館者に対してはマスクを配布し、装着を求めるなど、公共の施設として、より徹底した感染防止対策を、継続してとる必要があると考える。
- ・新型コロナウイルス感染症の流行の波が繰り返すことが予想されることから、消毒液の設置等、感染症予防のための対応を引き続き協議していただければと思います。
- ・withコロナ、ポストコロナ対策を引き続き検討していく必要がある。
- ・ミュージアムショップとカフェは博物館の魅力のなかで欠かせない要素だと思っています。引き続き「新たなモノ」の開発などに取り組んでいただきたいと思っています。
- ・一階ロビーの素晴らしい残響をもちいた公開型のクラシック室内楽コンサートは、平凡な受付エリアに刺激を与え、市民にとっては安心を感じ、気安に入れるイメージを残す。問題点や障害を整理解決する事で一層の注目を得られる。主体を市民と捉え、今後の活性化の為にイベント等を増やしてもらえればと期待しています。